



No. 135

ティーブレイク

Tea Break

エデンの東

年の瀬ともなると、テレビ番組で放映されるものの中には俄然と“懐かしのメロディー”の類が増えてくる。こうした“なつメロ”の中の定番の一つに「エデンの東」がある。中には、あの美しい調べがたくさん聞こえてくると、年の瀬を感じるという人もいるのではあるまいか。

この「エデンの東」というのは、ジェームス・ディーンの遺作として有名であるが、その題の如く、基本的には兄弟の争いのことを題材にしたものである。「エデンの東」は、アダムとイブの「エデンの園」の東にあり、カインとアベルという兄弟が始めて、兄弟同志で争って殺しあった場所なのである。

「エデンの東」では、優秀な兄と何かにつけて比較され、差別されてきた弟が、そうした境遇にもめげずに純粋に生きていく様が描かれている。この純粋な弟を、かのジェームス・ディーンが演じており、そこに多くのファンが生まれた。

純粋な弟は、都会に出て行った兄の代わりに家業を継ぎ、自分を差別した父親とともに暮す。「エデンの東」のその美しい調べは、かの弟の切なくて純粋な心と人生を表わしているかのようである。

ところで先日は、特許事務所の承継についての話があった。聞けば息子さんが二人いるのに、いずれもそれを継ぐ気が無いという。ある意味、二世や三世の方が結構目に付くこの業界では結構珍しい話だと思われたので、事情を聞いてみると、「弁理士みたいに苦労ばかり

多くて儲からない稼業なんか、やってられない」と言われたという。

それを聞いた私は、反論が出るよりも先に、同じことを言って家を飛び出てきた20年前の自分を思い出した。

自分の実家は材木屋。産業界の中でも、かなり下のほうの利益率しかない業種である。しかも材木は、重たい。更に建築現場では、足場が悪くて狭いところを運ぶことも多く、しかも商品を傷つけてはならず、慎重に扱わねばならない。神経も使うし、重労働であるのに、本当に割に合わない商売である。そして私はそこを逃げ出し、弟はそれを継いだ。

先の承継弁理士先生は、「どんなものでも、親というのは子供が一人前になれば、それでいいんだ。」と言っていた。それは確かに、ある意味では救いの言葉ではあった。けれども、それは親に対してだけしか効力は無い。

「弟は……」、どうなのだろうか。「エデンの東」では、都会に出て行った兄は弁護士になり、事業に成功し、名声を得る。弟は地元に残って、自分を差別した父を助けてその跡を黙々と継ぐ。

実はこれを他人事のように思えない弁理士も多いのではないだろうか。年末となり、「エデンの東」の調べが途絶えて第九ばかりになる頃には、地元で根を下ろしてくれている家族や兄弟に思いを馳せることを忘れてはならないのだろう。(正)